渡辺淳一

静寂(しじま)の声(こえ)

下巻

乃木希典夫妻の生涯

渡辺淳一

静寂(しじま)の声(こえ)

上巻

乃木希典夫妻の生涯

文藝春秋

静寂の声 上巻
——乃木希典夫妻の生涯——
著者 渡辺淳一
定価 一二〇〇円
一九八八年四月十五日 第一刷
一九八八年七月三十日 第七刷
発行者 豊田健次
発行所 株式会社 文藝春秋
〒102 東京都千代田区紀尾井町三の二三
電話 〇三(265)一二一一
印刷所 精興社
付物印刷 凸版印刷
製本所 加藤製本
万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします
© Junichi Watanabe 1988 ISBN4-16-362850-9 Printed in Japan

目次

序章　殉死　5
第一章　愛憎　23
第二章　旅路　120
第三章　転地　215

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

静寂の声

——乃木希典夫妻の生涯——

上巻

装画・片岡球子
AD・坂田政則

序章　殉　死

大正元年九月十三日、東京は朝のうちこそ晴れていたが、昼が近づくにつれて鱗雲(うろこぐも)があらわれ、午後になるとそれらがつながって空をおおった。盛夏はすでに終っていたが、暑さの名残りは雲が厚くなるとともに宙にこもった。それでも午後六時、落日は西の雲のきわを赤く染め、一瞬の輝きを見せて青山の野の先に消えた。

この日、明治天皇御大葬の日、陸軍大将乃木希典(まれすけ)は赤坂の自邸で午前五時に起き、まず階下におりて朝風呂を浴びた。入浴のとき、いつもは書生が介助をしていたが、この日にかぎって妻の静子に命じてゆっくり背中を流させた。

希典があがったあと、今度は静子が入った。夫はともかく、乃木家で妻が朝風呂につかることは異例であったが、御大葬の日なので身を清めたのだと、使用人の誰もそのことに疑いを抱いたものはいなかった。

午前七時、前日に書生から連絡を受けていた出入りの髪結いが到着し、風呂からあがった静子夫人の髪を結った。いつもは束髪であったが、その日は宮中へ伺うからということで、お下げを希望された。このとき静子は五十五歳であったが、白髪も抜毛もほとんどなく、長くうしろへ引いた髪は背中の半ばまで達していた。

髪が結い終るころ、隣室ですでに衣服を着けて、新聞を読んでいた希典が、「写真屋がきたが、まだか」とききにきた。静子は「ただいま」と答えてから髪結いに、「今日は宮内省から自動車がきてこれから参内しますが、そのあともう一度、青山に先帝のお見送りに行かなければなりません。夜までかかりますが髪がくずれなければいいのですが」といった。

髪結いは、「ぎっと大丈夫だと思いますが、もしなにかありましたらすぐお呼び下さい」と答えた。

この髪結いは十二年以上前から乃木家に出入りしていたが、平素は静子は自分で髪をあげ、髪結いが呼ばれるのは月に三、四度で、静子が公の式とか会に出席するときだけであった。

写真師は龍土町にいた山田写真館の主人で午前八時に到着したが、これも前日、乃木将軍の副官山田大尉が電話で、「閣下は明日、頭髪は苅らず、頬髭もそのままに記念の写真を撮りたいといわれているので、明朝八時までに邸に来て欲しい」というのを受けて、訪れたものだった。

写真師が着くと、希典は待ち兼ねたように玄関の右手の洋間から顔を出し、顎髭を撫ぜながら、どこの場所で撮るのがいいかと山田副官に相談し、それから急に気がついたように表門を閉めさせた。

乃木邸は現在も赤坂の通称乃木坂の上に残されているが、当時は赤坂新坂町と呼ばれ、左右はお邸が並んでいたが、前は人家もまばらでひっそりとしていた。

写真師は助手二人をつれてきてすぐ撮影の準備を整えたが、夫人が髪を結いあげたあとの衣服の着付けに手間どったので、まず希典だけが正面玄関を背にした石台の上に立った。服装は陸軍大将の正装に英国皇帝より下賜されたグランド・クロス・オヴ・バス勲章をつけ、左手に軍刀と白手袋、右手に将軍帽を持って直立した。

撮影に先立ち、希典は写真師に、「これから写すのはイギリスのコンノート殿下に捧げるものであるから、慎重に撮るように」と命じた。このとき、希典は明治天皇御大葬に英国国王御名代として出席したコンノート殿下の接伴役を仰せつかっていたのである。

写真師が念入りに焦点を合わせ、マグネシウムを焚いて二枚続けて撮ると、希典は今度はグランド・クロス勲章をとり、陸軍大将だけの礼装で石台の前に立ってもう一度カメラに向かった。

このあと、用意のできた夫人が現れ、夫と同じ石台の前に立った。このとき静子は頭髪をまとめてうしろに下げ、白襟に無地の薄茶色の召物に同色の袴、さらにその上に橡色の袿を着け、いわゆる第一期喪装礼服を着用していた。

写真師がいったんレンズを覗き、位置をたしかめると、夫人が「足のほうは撮らないようにして下さい」といった。

「大丈夫です、お足は袴で隠れていますから」と写真師が答えると、夫人はもう一度足元をたしかめ、それから扇子を左手に持ち、両手を中央に合わせたポーズで正面を見た。

ここでも念のため写真師が二枚撮ると、希典は「ご苦労」といって、静子とともに家のなかへ消えた。

写真師はなおキャビネと四つ切りの乾板を持っていたが、将軍夫妻がこのような正装で揃うことは珍しいので、「よかったら、御夫妻御一緒のところをお撮りになってはいかがでしょうか」と、山田副官を通じて申し出た。

希典は「こんな座敷では撮れないだろう」といったが、「それは大丈夫でございます。横長の乾板も用意して参りました」と答えると、しばらく考えてから、「それでは撮ってもらおうか」とうなずいた。

写真師は希典を椅子に坐らせ、その左手に夫人を坐らせようとしたが、希典が「お前はそこに立ったほうがいいだろう」といったので、夫人だけ椅子の横に立つことになった。希典はさらに、「なにか読んでいたほうがいいだろう」といって、自分から「明治天皇大喪儀」と大きな見出しのついた新聞を広げて読んでいるポーズをとった。

写真師は夫妻の位置がやや離れすぎて、あいだに丸テーブルとうしろのマントルピースがうつって少し不自然に思ったが、それが武人の夫婦の普通の姿かと思って、その位置で写真を撮った。写真ができあがって気がついたのだが、テーブルの上にあった将軍帽の先端の羽根が夫人の左の胸まで達し、夫人が胸に羽根飾りをつけているように見えて写真師は恐縮したが、それが夫妻の最後の写真になるとは、むろん知るよしもなかった。

部屋での撮影を終るとほとんど同時に、門前に自動車が到着した。夫妻は副官と女中に見送ら

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

れて玄関口を出て門まで行き、静子が先に車にのりかけた。そのとき、うしろに立っていた希典が近づき、静子の背についていた糸片をとってやり、軽く背を二度叩いた。それに気付いて静子は振り返り、無言のまま会釈した。

これを見ていたのは、乃木家に同居していた静子の姉の馬場サダ子であったが、日頃慇懃な乃木夫妻にしては珍しい情景として、記憶に残った。

宮中に参内した乃木夫妻は、午前十時、諸顕官とともに殯宮祭に参列し、三陛下、内親王、皇族に続いて先帝の柩に別れを告げ、十一時に静子がまず帰邸した。希典はこのあと、伏見宮邸に滞在していたコンノート殿下を訪問、ご機嫌を伺ったのち十一時すぎに家に戻った。

このあと、夫妻はそれぞれ二階の廊下をはさんだ自室に籠ったまま姿を見せなかった。

昼食は正午丁度に、夫妻と馬場サダ子、そしてサダ子の孫の英子の四人が同席した。テーブルをはさんで夫妻が並び、サダ子と英子が向かい合ったが、それは四人で食事をするときの、いつもの坐り方だった。

乃木家の食事はいつも質素で、その日も手製のそばとお新香だけだったが、希典は軽くそばに手をつけただけだった。

「今日は大役で大変ですね」

このところ、食の細い希典を案じてサダ子がいうと、

「ぜひ桃山御陵までお伴したいと思っていたのだが、今日も宮中で会った方々に、顔色が悪いから大切にせよといわれたので、あきらめることにしました。儂はなんでもないと思うのだが、そ

んなに顔色が悪いかなあ」とつぶやくようにいった。
「それは、お髭が伸びたせいですよ」
珍しくきっぱり静子がいうのに、これも珍しく素直に希典がうなずいた。
七月三十日に明治天皇が亡くなって以来、希典は頬髭も顎髭ものばしたまま、いっさい剃刀を当てなかった。おかげで頬から顎にかけて白いものがふえ、それが六十四歳という年齢以上に老いの影を濃く見せていた。
「ともかく、少し休むことにしよう」
希典はそういって食卓を去ったが、静子はそのあとも残り、サダ子や英子と普段と変らぬ会話を交した。
やがて静子も自室に戻り、茂みに囲まれた乃木邸は雲がふえてきた午後の空の下で静まり返っていた。
そのまま夕食のときまで、夫妻は部屋に閉じ籠ったまま、階下へおりてこなかった。ときたま希典が女中を呼んで用件をいい渡したが、それもドアごしで、女中が命じられたものを持っていくと、ドアを軽くあけて受取るだけで、なかには入れなかった。
あとで考えるとやや異様な雰囲気ではあったが、先帝崩御後、希典は自室に籠り、ドアごしに用事をいいつけることが多かったので、使用人はとくに不審には思わなかった。静子の場合も部屋で一人でいることが多く、よく縫物や刺繍などをしていたから、この日もそうなのだろうと思っていた。

そのまま五時が過ぎ夕食の時間になった。

昼食のときと同様、今度もサダ子と英子が同席した。相変らず簡素な食卓であったが、希典は初めに静子の酌で少量の葡萄酒を飲み、静子やサダ子にもすすめた。

このごろの希典は、かつて大酒飲みでならしたころとは違って、酒類はほとんどたしなまず、稀に機嫌のよいときやお祝いごとのときに、軽く葡萄酒を口にする程度であった。

希典は赤い葡萄酒をゆっくりと味わうように飲んだが、静子は軽く口をつけただけで、ほとんど飲まなかった。

希典はさらに皿の上にあった蒸しパンをとり、外の皮をよけ、内側のやわらかいところだけを数片梅干をつけて食べた。途中で英子に、「美味しいが、一つどうかね」とすすめたが、英子が「わたしはご飯のほうをいただきます」と答えると、「今日はご遠慮かな」といって笑った。

その間、静子はほとんど無言で、やはり蒸しパンを手にとったが、半分も食べなかった。

もちろん、これが乃木家の最後の晩餐になろうとは、サダ子も英子も夢想だにしなかった。

明治天皇御大葬の会場は青山葬場で、天皇の御柩の安置された霊轜（れいじ）の宮中出発は午後八時と定められていた。これ以前、昼ころから、宮城から馬場先門、さらに青山通りに至る道筋には、葬列を一目見ようという人々が詰めかけ混雑していた。とくに午後からは集った群衆で、赤坂見附あたりではしばしば電車が立往生した。

やがて夕暮れが近づいた午後五時、数千の堵列（とれつ）兵が道筋に整列し、宮城前広場には府下各学校

代表者五万人が参集し、さらに宮城に向かって、左に紅帽白衣の近衛軍楽隊を先頭に儀仗前隊が、右には儀仗後隊二万名が馬蹄形に整列した。また二重橋前、外庭芝地内の天幕には貴衆両院議員、帝国学士会員、高等官、東京市長以下、各道府県知事、各市町村長らが並び、堵列隊のうしろには百をこす民間団体代表者と市民、さらに地方から上京した者達が、空地という空地をうずめて立錐の余地もなかった。

午後六時、なまあたたかい落日とともに急速に暮色が迫るとき、道筋に連ねられていた篝火にいっせいに火が点された。さらに二重橋から馬場先門にそっては千二百燭のアーク灯が白い光を放ち、風はないが火勢で焔とともに淡い煙が闇にたなびき、それが一種壮麗で崇高な雰囲気を漂わせた。

やがて午後七時、同盟国英国国王から差遣された英国海軍儀仗兵五百人が入場、続いて文武百官三千余人が二列に整列した。

すべての準備が整ったのは七時半、一時見えた三日月も雲に隠れ、とっぷりと暮れた闇のなかで、アーク灯の明りと篝火の明るさだけがいっそう色をました。

いうまでもなく、この大葬に乃木夫妻は出席する予定であった。午後七時に各官とともに宮城前広場に整列するとして、午後六時には新坂町を発たなければならなかった。

だが六時を過ぎても、夫妻の部屋は静まり返ったまま出かける気配はなかった。

どうしたのか、女中達が案じていると、希典がぶらりと二階から下りてきて、「カステラはな

いかね」ときいた。

女中の一人が台所の戸棚からカステラを持ってくると、希典はそれを盆のまま受取って厩に向かった。

乃木家の厩は同じ敷地の玄関の左手にあった。先の大戦の功により、希典は千五百円の御下賜金を賜わったが、希典はこれを断った。だが取決めによりどうしても受取らねばならないときかされて、希典はそれをすべて厩の改築費に当てた。そのため乃木家の厩は当時としては珍しい煉瓦づくりで、馬房も大きいのが二つあるゆったりしたものだった。

このとき厩には「乃木号」一頭しかいなかったが、この馬は旅順攻略のあと水師営の会見で、敵将ステッセルから贈られた「寿号」の仔であった。日露戦役中、希典は「寿号」を愛用したが、明治三十九年種馬として鳥取県に出し、「寿号」の仔馬をもらって愛馬としたのである。

希典が好物のカステラを持っていったとき、「乃木号」はまぐさを食べていて、カステラには見向きもしなかった。希典はしばらく馬を眺めていたがあきらめて部屋へ戻り、三十分後に再びカステラを持って現れた。今度は「乃木号」は前がきをして欲しがったので、希典はカステラをすべて与え、鼻面を愛撫した。

「御大葬には行かれないのですか」

厩から戻ってきた希典に女中がきくと希典はうなずき、「多勢のなかに入ってお見送りしても騒々しいだけだから、出かけるのはやめて家でお祈りをすることにした。しかしお前達はせっかくの機会だから、仕事はそのままにして早く出かけなさい」と大葬を見に行くことをすすめた。

やがて七時になり、日は完全に暮れた。普段は静まり返っている乃木邸の前も、大葬のおこなわれる青山の方へ向かう人の話声や下駄の音などがきこえた。すでに葬場の周辺は大変な人出で、簡単には道筋に行きつくことも出来ないという噂であった。

七時半を過ぎたとき、希典は再び階下へおりてくると外へ出て庭をゆっくり散策し、庭内に分祀してあった沙々貴神社と祖先の霊前で長いあいだ合掌した。

乃木家の女中達が希典の姿を見たのは、これが最後であった。

静子はその前に二度ほど部屋から出てきて、台所から納戸までなにか用事あり気に見て廻り、女中や書生達に「ご苦労さま」と声をかけた。さらに大葬に行きかねてぐずぐずしている女中に、「生涯にまたとない機会ですから、早く支度をして出かけるのですよ」と、希典と同じことをすすめた。

静子が最後に階下に姿を現したのは、七時四十五分であった。このとき静子は階下の戸棚から葡萄酒の瓶をとり出し、二階へ持ち去ろうとして偶然、英子と顔を合わせた。

「叔母さま、叔母さま」

十四歳の英子が、今日一日中なんとなくゆっくり話すことがなかったので甘えかかると、静子は少し慌てた様子で、「お前の邸にも行きたいんだけど、忙しくってね」と、わけのわからぬ言葉を残して二階へ去った。

七時四十分、闇に閉ざされた広場に、近衛軍楽隊が奏する「哀の極(きわみ)」が流れた。葬列の先頭に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com